

## 論文の要旨

論文題目      ロビンソネイドにおける主体の変容——  
                    R・M・バランタインからアーサー・ランサムまで  
氏名             水間 千恵  
学位             博士（文学）  
授与年月日     平成 18 年 7 月 31 日

本研究は、19 世紀半ばから 20 世紀半ばにかけてイギリス（連合王国）で出版された少年向け・子ども向けの冒険小説におきた変化とその意味を、ロビンソネイドに焦点を当てることによって探るものである。

ロビンソネイドとは、Daniel Defoe の *Robinson Crusoe* の影響下に生み出された小説群あるいはそのジャンルを指す。たいていの場合、それらは、島を舞台にした個人あるいは集団のサバイバルを描いており、19 世紀から 20 世紀にかけてのイギリスでは、大衆小説あるいは児童文学作品として受容されることが多かった。このジャンルに属する作品は、それぞれが多様な意味を創出しているとはいえ、プロット、テーマ、状況設定などにおいて原点となるデフォー作品との同一性が強いため、作品相互の差異分析を手段とする考察に非常に適した素材を提供してくれる。ロビンソネイドのこのような性質を活かして文学作品を通じた文化研究を行なったのが Martin Green である。彼は、冒険小説を「白人ヨーロッパ諸国の膨張的帝国主義動向の文学的反映」と位置づけ、主として西洋帝国主義と強く結びついた社会的、文化的要素との関わりでロビンソネイドの変遷をたどっている。さらに、グリーンが編んだロビンソネイドの変遷史を、より分かりやすい枠組みのもとに再構築したのが岩尾龍太郎である。岩尾は、始祖ロビンソンの物語を近代ブルジョワ社会の起源神話として位置づけたうえで、以後の変化を、「直接的模倣（逃避型恋愛冒険）譚」（1720-1762）、「教育的ロビンソン」（1762-1812）、「冒険ロマン的ロビンソン」（1812-1904）、「寓意的あるいは反ロビンソン」（1904-現代）という4つの時期に大別し、それぞれの特徴を独自の視点を交えて分析している。

本論文は、これらの先行研究を踏まえたうえで、イギリスにおける植民地主義とのかかわりで重視され、しかも児童文学史においてもその黄金時代と評されている 19 世紀半ばから 20 世紀半ばという時代に注目し、この時期に子ども向けに出版された代表的なロビンソネイド作品をとりあげ、そこで描かれる主体について分析することを主要な課題として設定した。作品ごとに変化する主体の表象を、国民国家のイデオロギー（それはこの時期においては、植民地への欲望を伴う帝国のイデオロギーと言い換えること

ができるのだが)への恭順、不安、抵抗の痕跡として捉え、男性性／女性性を始めとする、性をめぐる概念を中心軸にこれを読み解くことが、論文全体の支柱であり、先行研究と一線を画する部分である。さらに、分析の対象をとくに子ども向けの作品に限定することによって、児童文学作品に表面化している、あるいはそこで隠蔽されている、大人から子どもにむけて(あるいは子どもという概念を通じてほかの大人にむけて)放射されるイデオロギーを明らかにしている点も、本研究の独自性を支える。

議論の出発点に据えた考察対象は、ロビンソネイドが帝国のイデオロギーともっとも密接な関係をもっていた時期の代表作、あるいは、冒険ロマン的ロビンソネイドの典型作と位置づけられる Robert Michael Ballantyne の *The Coral Island* (1857) である。そして、この『さんご島』からの影響関係が明確で、かつ、ロビンソネイドの歴史と児童文学史に大きな足跡を残している3人の作家の作品、Robert Louis Stevenson の *Treasure Island* (1883)、1904年初演の芝居に基づく James Matthew Barrie の *Peter Pan* を主人公とする一連の作品、そして Arthur Ransome の *Swallows and Amazons* (1930) とその続編をとりあげた。各章の概要は以下のとおりである。

帝国主義と強く結びついた19世紀の少年向けの冒険小説は、それが大人の承認を得たリスpekタブルな作品であれ、規制・排除の対象となった扇情的な作品であれ、プロットとテーマにおいて、多かれ少なかれ時代思潮に沿った植民地への欲望を秘めていることは必然である。『さんご島』をとりあげた第1章において分析したのは、そのような欲望を実現するためのシステムそのものであった。結論から言えば、それは、「性」を媒介に、少年の心身の規格化を推進することで実現されたのである。この時代の少年向けの冒険小説は、そのほかのさまざまな社会的、文化的制度とともに、国家の要請に適う個を創出するためのイデオロギー装置として機能していた。そこでは、主人公を取り巻く英雄的な成人男性の姿を通して望ましい男らしさが提示されると同時に、そのような男らしさを賛美する少年主人公が配されているため、主人公に感情移入する読者の少年たちは、獲得すべき帝国の建設者にふさわしい資質を、最小限の抵抗で受け入れることになる。要するに、冒険小説は、帝国の建設者にふさわしい男らしさの諸相を提示し、これを理想化することで、少年たちにそのような英雄的資質をみずからすすんで内面化させていたのである。しかも、遠い海の無人島を舞台にするロビンソネイドの場合は、直接、少年たちによる植民地獲得を英雄的行為として語ることもできた。その結果、たとえ作者自身の意図がどこにあらうと、『さんご島』は帝国のイデオロギーを少年に内面化させる教具として機能したのである。

だが、第2章で分析した『宝島』の場合は、『さんご島』の強い影響下に創作されたにもかかわらず、決して国家のイデオロギーに従順な作品とはなっていない。そこで描かれているのは、成人男性の権力闘争であり、健全さとは無縁な道徳観が支配する世界である。権力闘争の過程で明らかになるのは、ジェントルマンと呼ばれる人々の非英雄性であり、バルンティンが描いたような伝統的な男性性の失墜である。何より特徴的な

のは、法規範、経済システム、階級制度など、あらゆる意味で現行体制の規範からの逸脱者である海賊 John Silver が、少年 Jim の目を通じて英雄視されている点である。つまり、この作品で提示されているのは、理想化された男性性を再生産することで安定を保っていた社会が揺らぐさまだといえる。さらに、シルヴァーが黒人女性を妻にもち、ジムをめぐる性的欲望にも関与するため、彼が示す社会規範からの逸脱性は性的逸脱性にも結びつく。しかも、シルヴァーが示すこのような特徴は、主人公ジムと、もっとも紳士らしくみえる医師 Livesey にも書き込まれているのである。このような特徴から、『宝島』の物語世界は、成人男性が持つ、金銭や権力に対する欲望と少年に対する性的欲望の交差する空間であり、19 世紀末のイギリス社会が批判的に映し出されているものと理解できる。しかも、結果的に、その批判精神は、社会のありようだけではなく、人間のあり方そのものにも向けられる。ここで描かれているのは、確立し安定した個ではなく、階級や地位などにふさわしい「らしさ」をふるまうことでアイデンティティを作っていく個なのである。

第3章で考察の対象としたのは、『ピーター・パン』である。この作品は、永遠の少年を描いたおとぎ話だと解されがちであるが、じつは、成人男性の苦悩を描いた作品でもある。物語に登場するふたりの成人男性のうち、Darling 家の当主は、夫や父親という役目に象徴される成熟した男性性を体現している。だが、新興中産階級の典型的父親として生活水準を維持しようと涙ぐましい努力を重ねているその様子はアイロニカルな視点で描かれ、徹底的にこけにされている。彼が守ろうとしているのは社会的リスペクタヴィリティであり、それを維持するため、彼の生活のすべてが金に支配されていることが強調される。このようなダーリング氏の姿を通じて、資本主義社会で理想化される男性性の負の側面が明かされる。さらにもうひとりの成人男性、すなわち、『宝島』のシルヴァーから逸脱性を引き継いだ Captain Hook の描写によって、作品が否定するもうひとつの男性性が明らかになる。世紀転換期の文化的背景にあてはめてみると、「女っばい」と描写されるこの海賊の役割は、家庭を守る父親に対置されるべき家庭をもたないホモセクシュアルだと解釈できるのである。物語の性質上、このふたりが示す成人男性像がピーターに提示された選択肢だと考えられるため、ピーターが両方を拒否するという結末は、家庭に入ることも、家庭から逃れることも、等しく忌避していることを意味する。ヘテロにもホモにも分類されないということ、それこそがまさに「大人にならないこと」なのだ。このように、『さんご島』と『宝島』の直接の影響下に創作され、数多くの冒険小説からの引用で成り立っているにもかかわらず、『ピーター・パン』は、性をめぐる統制を通じて少年の心身を規格化してきた冒険小説の価値を完全に否定している。しかもその拒否は、国民国家によって正常、正当とされるヘテロセクシュアリティのみに向けられているわけではない。際限ないアイデンティティ不安に悩まされた挙句、身投げ同然に船端から落ちていくフックの最期に示されているとおり、ホモセクシュアリティも等しく排除されているのである。バリの原作はこのように示唆に富むテキ

ストであるにもかかわらず、そこから生み出された数々の改作は、さまざまな要素を削除あるいは付加することによって永遠の生命を象徴する美しい子どもを描いた作品となり、子ども部屋での地位を確立してきたのである。この作品が子ども部屋に浸透していく過程が示すものは、じつは、子どもに照射される大人の欲望そのものなのである。

第1章で、少年の心身の規格化をめぐる問題から出発した議論は、第4章において、少女の身体に作用するイデオロギーの考察で終点を迎える。ランサムのロビンソネイドで描かれているのは、「大人にならない海賊の少女」である。伝統的なロビンソネイドであれば主役の位置を占めるはずの、父の規範を内面化している少年たちに、もはや冒険を動かす力はない。冒険を支配するのは、逸脱の主体としての海賊 Nancy Blackett である。古くより、社会的な規範から逸脱する女性を主人公とする物語は数多くあっても、それらはたいがい、主人公が体制に順応する形で物語が締めくくられていた。男の子になりたがっていたおてんば娘が、成長して妻になり母になるというのは、その顕著な例である。だが、ランサムの作品に登場する逸脱者ナンシイは、そのような伝統を受け継いでいない。しかも、このシリーズは、ナンシイ以外にも、大人の女性海賊 Miss Lee を描き、両者を並べることで、ナンシイの特異性をさらにはっきりと示している。ミス・リーが最終的に権力の担い手として男性の地位を占めることを選択するのに対して、ナンシイは決して男性の地位を脅かさない。つまり、女性性にも男性性にもからめとられることのないナンシイは、永遠の子どもであり、永遠に反体制的存在だと考えられる。このようにして『ピーター・パン』のなかで分裂していた子どもと海賊は女性の身体において統合される。最初から「男」でないナンシイは、父の規範を内面化する必要はなく、それを内面化しなくとも、嫌悪の対象としての性的逸脱者とみなされることもない。その結果、『ツバメ号とアマゾン号』の海賊は、体制への抵抗を示しつつも、その価値を完全に崩壊させることがない、英雄性を備えた逸脱者としての地位を回復しているのである。それゆえに、ランサムの作品には、体制の外部を目指したバリの作品にはない安定性が確保されているとも考えられるだろう。ランサムの作品が、改作者たちの手を経ることなく子ども部屋の古典となっている理由の一端も、このあたりに求めることができるかもしれない。